魏周易代期における庾信の転回

加藤国安
（漢文学研究室）

はじめに

これまで筆者は、梁朝および西魏下における庾信の事跡と文学について順次検討してきた。[1] 彼の入北前後について、子細な分析を必要とした背景には、近年、庾信の作品の制作年代について、従来とかなり異なる見方が少しく報告されるようになってきたことが大きい。それは、魯同群・王仲鏞・凌迅氏等の諸論文における指摘だが、[2] 彼らの取り上げた作品や年代推定は少しずつ異なるものの、従来最晩年の作とされてきた「哀江南賦」「擬詠懐」「擬連珠」等を、おおよそ入北後まもなくの、いわば庾信にとっての最激変期のものとする方向では、彼らの立場は一致する。その立論の根拠だが、まず基本的に、「思うに、まさにここには（＝「哀江南賦」）沈欝で複雑な感情があるが、この時期こそ彼が創作情熱を最もみなぎらせていたはずであり、軽靡淫艶な作風より慷慨憂愁的なそれへと、転じていった重要な転節点なのだ」という、作品それ自体の特徴に注目せざるを得なかったであろうし、そうすると「庾信の一生の中で、一体いつがこのような作品を書くに最も適当な時期であろうか」（以上、王氏）という、彼の事跡と作品の創作の関係について素朴な疑問が改めて生じてこざるを得なかっただろう。その結果、三人各様に陳寅恪の旧説の全面的な再検討を行い、このような推論に至ったものと思われる。

右の三作品の制作年代をより明確にするには、かなり複雑な内容であるだけに、今後も検討を続けて行かねばならないが、今は右述したようなおおよその方向に沿って、筆者もこれまで庾信の入北前後の精神的葛藤や沈欝な感情を、可能な限り深く解明しようと試みてきた。そして、『左伝』を善くした庾信が、『左伝』の特徴である政治倫理を一基準として「哀江南賦」を執筆し、梁朝に政治倫理上の重大な腐敗のあったことを捉え、その滅亡を歴史的必然と受け止め、江南貴族社会の終焉をこの賦において悲嘆したものであることなどを見た。また、政治に重要な責任を負うべき存在として、貴族を再び政治の世界に取り込んだ、梁朝の「新貴族主義」のいわばシンボル的人物として、彼がその理念の典型的な実践者たるがゆえに、異朝への帰順をめぐり、他の梁朝人と異なり強固なレジスタンスとしての隠棲を展開せんとするものの、しかしつい

には節を屈せねばならなくなるまでの苦悩の経緯などをたどってきた。

小論では、これらの前稿を受けて、その江南貴族制の理念の最後の実践者ともいうべき庾信が、西魏に屈服後深い苦悩に沈みながら、さらにその淵よりどのようにして転回を遂げていくのか、彼のそうした精神的軌跡を中心に論じてみようと思う。

第一章　西魏における庾信の二度の任官

五五六年（庾信四十四歳）のおそらくは初め頃、庾信は三年の抵抗の後、西魏に降ったであろう。これで「三年、別館に囚われ」「南冠の囚」（ともに「哀江南賦」序）となった、実質上の軟禁生活から解放されたことになる。しかし、帰順後の彼の精神世界は、その負目から内向化し、極端にデモーニッシュなものになっていくように思われる。その苦悩する魂の告白が、「枯樹賦」であろう。この中には、意に反して敵国の禄を食むわが身への悲嘆と、半死半生の状態に陥った苦境がるる述べてある。

では、その時庾信に下命された官はどんなものだったのであろう。庾信が魏周交代期に拝命した職官について、各資料は次のように記している。[3]

○　江陵平らぎ、儀同三司に累遷す。周の孝閔帝が（五五七年一月）践祚したおり、（庾信は）臨清県子に封ぜられ、司水下大夫に除せらる。出でて弘農郡守となる。驃騎大将軍・開府儀同三司・司憲中大夫に遷り、爵を義城県侯に進む。（『北史』巻八十三　本伝）

○　江陵平らぎ、使持節・撫軍将軍・右金紫光禄大夫・大都督を拝し、尋いで車騎大将軍・儀同三司に進む。孝閔帝践祚し、臨清県子・邑五百戸に封ぜられ、司水下大夫に除せらる。出でて弘農郡守となり、驃騎大将軍・開府儀同三司・司憲中大夫に遷り、爵を義城県侯に進む。（『周書』巻四十一　本伝）

○　太祖（宇文泰）は魏朝を夾輔し、関右に相となる。…亦た子山（＝庾信）に見え、職を賜うこと旧の如くするは、我が太祖の策を魏帝に献じ、命もて荊衡に将せるに属る。尋いで本朝（＝北周）の（王子宇文覚の）青蓋（＝王子の乗る車）の入洛する（＝孝閔帝の即位）に値い、是に於て節を拾い入仕し、乃ち覇恩に沐す。改めて使持節・車騎大将軍・儀同三司を授かる。…高官美宦は旧国に踰る有り。又、驃騎大将軍・開府義城公に遷る。（滕王逌原序）

以上、三種の記述には少しずつくい違いがみられるが、ここでいささか繁鎖にわたるが、庾信の職官について考証してみよう。まず、『北史』だが、「江陵平らぎ」の後が、突然「儀同三司に累遷す」となっている。「累遷」であれば、その前に何らかの同様の官職がなければならないが、『北史』にはその記載がない。『北史』の場合、この後の部分の記述も簡略・疎漏な点が見られ、今、我々が検討する問題を解明するのに、本文は資料的価値の十全でないことが分かる。

次の『周書』だが、記述がだいぶ詳細で、庾信の当時の職官の変化が具体的にうかがえる。それによれば、まず庾信が西魏より最初に下命された官は、「使持節・撫軍将軍・右金紫光禄大夫・大都督」であり、ついで「車騎大将軍・儀同三司」へと進んでいることから、西魏にて二度官を受けていることが分かる。では、この両官の拝命と先の「枯樹賦」の制作の時期とは、どのような関係になっているのだろうか。すなわち

その制作は、最初の官後なのか、二度目の官後なのだろうか。そのいづれなのかを知るためには、まず両官の差異が理解されねばならない。

そこで、今、『周書』巻二十四の盧辯伝に付す職官表を検するに、表の最上位より数えて第四番目（八命）に、「征東・征西・征南・征北、中軍・鎮軍・撫軍将軍、左右金紫光禄大夫・大都督」がランクされており、この傍線部が庾信の最初の官名に相当することになる。次に、同表の最上位より第二番目（九命）に、「車騎・驃騎大将軍、開府儀同三司、擁州牧」がランクされており、これによれば庾信は第八命より正八命を飛びこえて第九命に二階級昇進したことが分かる。

次に、この両官の職務上の違いが何か、ということだが、この点は不明な部分が多いが、理解できた範囲で述べることにする。それを考察するには、『隋書』百官表が参考になろう。なぜならば、それは「（隋の）高祖、また後周の制を採り」（同上）、定められたもので一連の流れを有する上に、さらに各職官の性格づけまで記しているからである。それによれば、「左右光禄大夫・金紫光禄大夫・銀青光禄大夫・朝議大夫有り。並べて散官と為し、以って文武官の徳声ある者に加え、並べて事を理めず」と記されている。これにより推測するに、庾信の最初の職官も、その「徳声」に対して授与された散官にすぎず、「事を理めず」、すなわち西魏の実際の朝政に参与する所まではまだ至っていなかったのではなかろうか。しかし、二度目の「車騎大将軍・儀同三司」には、この「右金紫光禄大夫」は外されている。とすると、この時点で、庾信の身分に何らかの変化があったのかも知れない。この西魏の軍官系統における儀同三司が単なる散官でないらしいことは、谷川道雄氏によりすでに指摘があるが、[4]それによればこの時庾信は、西魏の政治の基盤をなす府兵制を支える幕閣の一員として、実質的な任務についたかどうかは不確定だが、ともかくもそこに迎えられたことを物語ろう。この点は、後に「枯樹賦」の作品分析を行うときに、重要な問題になってくるので、その時改めて検討することにしよう。

さて、最後の「滕王逌原序」を見てみよう。まず、西魏期の任官だが、この時に宇文泰が庾信に授けたのは、梁の旧職と同等のものだった、とのみ記される。ついで、周の時代に移り、孝閔帝の即位により、「改めて使持節・車騎大将軍・儀同三司」を授かったと記す。ということは、この「改めて」の意味は、『周書』の記述を考慮するならば、西魏時代に一度同じ官職を得、北周朝になって改めてそれを拝命した、ということであろう。しかし、さらにもう一つ前の最初の官である、「使持節・撫軍将軍・右金紫光禄大夫・大都督」については、それを伺わせる何らの言及もない。滕王が西魏時代の記述を略したのは、北周を中心とした庾信の事跡を記そうとしたからかもしれない。

以上、いささか繁鎖になったが、魏周交代期の庾信の職官の変遷を考証してきた。もう一度整理しながら、当時の庾信の状況を再現してみると、まず五五六年のおそらく早い時期に、宇文泰より梁の旧職（右衛将軍）に匹敵する最初の官として、おそらくはかなり一方的に散官だが、「使持節・撫軍将軍・右金紫光禄大夫・大都督」を下命されたろう。この前後の作かと思われるのが、「慨然成詠」詩で、

新春光景麗　　新春　光景　麗わしきも
遊子離別情　　遊子　離別の情あり
交譲未全死　　交譲　未だ全くは死せず
梧桐唯半生　　梧桐　唯だ　半生

「交譲」は、左思の「蜀都賦」に詠われる、蜀都にあったという対生の樹木で、一方が枯れれば他方は生き延び、それを交互に繰り返すとされ

るものである。また、「梧桐」は、枚乗の「七発」に描かれる、龍門の桐を指し、高さ百尺もあったが枝が全くなく、半死半生のままそびえていたという。いわば、庾信の現在おかれている状況をたとえたもので、その落胆・慨嘆ぶりや、また「新春」という表現からして、最初の任官の下命と関わる作ではないか、と推測される。また、反対に、このような内容の作品のあることが、最初の任官の時期を、五五六年の、初め頃であることを一層動かしがたいものにしよう。

しかし、それが庾信の西魏に対する心情を和らげてくれるどころか、反対に一層の屈辱感をもたらすものであったことは、彼の諸々の作品に明らかに述べられるところである。しかし、庾信はほとんど「周粟を食む」ことを悲嘆するばかりで、この新しい状況にかたくなに心を閉ざそうとするかのごとくである。それまでは梁朝滅亡の原因を探って、追求の目を梁の内外の政治的・倫理的矛盾に向けたり、また西魏への不服従の闘争を行っていたのが、これを機に今度はその視線を自己の内部に集中的に注ぐようになった結果、己の矛盾との激しい格闘が始まることになる。こうしてすでに前稿までに論じたような、政治倫理に対しきわめて良心的だった庾信の精神は深く内向化し、「自己へのかえりみ」（マックス・シェーラー）現象が生じ、[5]それが極端化し、しだいに出口のない「樊籠の鶴」（「擬連珠」其二十二）となって自己を責め続け、憂悶のうちにデモーニッシュな世界が形成されるに至ったと、考えられる。しかし、注目すべきことには、その後庾信は、この重大な危機を経て、やがて敵將宇文泰との親密な交流を始めることとなるのである。この転回は一体どのように説明されるべきなのであろうか。この困難な問題を解明する一つの鍵こそは、「枯樹賦」に外ならない。

第二章　「枯樹賦」の内容
―屈服後のデモーニッシュな世界―

「枯樹賦」の全体の構成は、序と換韻によって分けられる十のスタンザからなる。本賦のおおよその意味は、すでに興膳氏によって示されてはいるが、[6]作品自体がきわめて難解であるため、賦全体の構成と意味の展開、およびその芸術的意図がどのようになっているのか、まだ十分に解明されていない部分があるのも事実であろう。そこでここではできるだけ重複を避けながら、そうした問題について分析を進めていきたい。

まず、序の部分から見ていこう。

昔　天下に　その名を知られ
風流儒雅　といわれし　殷仲文
時世が変わり　とある地方に　回されるや
いつも　心は　楽しまず
わが庭の　槐に向かいて　いいけるは
「この樹の　何と　生気のないことよ」と

この殷仲文の原話は、周知のように『世説新語』黜免（ちゅつ）篇にあり、ここでは義弟桓玄の腹心として、ともに東晋の滅亡を企て敗れ、のち投降し大司馬府（劉裕）の庭の槐を見ること久しく嘆いていった、ということになっている。そして、後に東陽太守に遷されたと、『晋書』巻九十九の殷仲文伝には記される。ところが、庾信はそれを右の詩中にいうように、東陽太守に遷された後の感懐として改変する。

これについては、清の顧炎武の『日知録』巻十九「仮設の辞」の発言が、参考となる。[7]

古人、賦を為すに、仮設の辞多し。往事を序叙し以って点綴を為すに、必ずしも一一符同せざる也。…庾信の「枯樹賦」は、既に殷仲文出でて東陽太守と為ると言う。乃ち復た（賦末の）桓大司馬（温）も亦たこの例に同じ。

すなわち、賦の冒頭の殷仲文、末尾の桓温の設定は、賦に常用される仮設（フィクション）の法だ、というのである。これは、この設定により多少史実が歪曲される点があっても、作者が特に強調したいことがより明確化されるという、効果の方を重視した芸術的技法ということになろう。

桓温については、賦末で後述することにして、この殷仲文の場合を見てみよう。『晋書』殷仲文伝によれば、「少くして才藻有り、容貌美わし。…（桓）玄、位を（東晋より）簒い宮に入り、（楚朝を興すも、…のち）劉裕のために敗らるる所となり、（仲文は）玄に随いて西走し、…巴陵に至る。」と記され、彼がその豊かな才能をもって、新たに楚朝を興した桓玄のために、その側近として補佐するものの、結局敗れ江陵や蜀方面に逃走するはめになることが知られる。その後、劉裕に投降し、都に帰ってかっての敵側の官につくが、つねに快々として「腹心の疾い」から免れられなかった、という。そして最後には、劉裕への謀反を起こし、無惨な死を遂げるのである。以上、見てきたように、この「善く文を属り、世の重んずる」文人貴族にして、「自ら謂うに必ず朝政に当たる、と」と自認した政治家・殷仲文の悲劇的経歴は、庾信にかなり近似する面がある。これよりすれば、この「仮設」法の狙いは、その殷仲文の悲劇性をさらに強調して、その憂悶に沈む自己の現在に結び付ける点にあり、それゆえにあえて東陽太守に移された後のこととしているのだ、と考えられる。

さて、第一節にはいう（脚韻：梓・裏・死）、

（樹にも　様々の　運命のありける）
敦煌の白鹿に　長き貞節を　誇る松あり
また　青牛に　化身せんばかりの　梓の巨木あり
（彼らは　万年の生を　長らえおるもの）

それらとは　反対に
漢の武帝の　愛せし李夫人の　死とともに
亡べる　桂あり
また　枚乗の　詠みし
龍門の　半死半生の　桐もあり
（彼らは　悲しき生を　終えるもの）

冒頭より、樹木に関する古典上の諸エピソードをおし並べ、その文学的教養を際だたせているのが注意される。また意味としては、平穏なまに長寿を全うする幸運な人間と、何らかの運命に巻き込まれ、悲劇的な生涯に終わる人間とを対比的に捉えたものと解される。庾信はこれから後者のケースについて、前者との比較において、その悲運のいかばかりなるかを描いていく。

第二節にいう（脚韻：根・園・門・鴛・猿）、

（わが槐には　いかな運命の　ありける）
その昔　広き土地より　狭い畑に移され
また　都の　壮大な宮殿にて　咲ける花の
今は　田舎の園に　実を落とせる

この木は　かつて　かの崑崙の北の　谷にて
黄帝が　初めて定めた　美しき音律を有し
また　彼の作れる　「雲門」を　奏でてもおり

そを喜び　かつて　雛を率いて　鳳凰の群がれるも
今は　その悲しみに　感じてか
鴛鴦の　翼を並べて　巣をかけるのみ

その　哀切な　鳴き声は
かの　刑死せる　陸機の　辞世のことばにいう
「華亭の鶴」か
はたまた　四川の明月峡の野猿のよう

本節前半にいう「その昔、広き土地」「都の荘大な宮殿」にあった槐とは、庾信の詩に「年少にもかかわらず　東宮の顧問をかたじけなくし　また高官をみだりにせる、緑つややかな槐は　学士院にその葉を垂れ　長い楊の木は　宿直の館にその光を映じける」（奉和永豊殿下言志十首　其八）と、甘美な夢のように回想される、華やかなりし頃の江南の建康のそれを指そう。また「狭い畑」「田舎の園」と述べられるのは、無論それに比して田舎臭いここ北地をいう。まるで異なる環境への移植が、この木の運命の大きな変化を暗示する。

続いて、この槐の生来的に具わる美しき諧和性が称えられる。ここでは古代の黄帝伝説と関係する話を上げ、その音律美をもって象徴させられているが、槐は元来その威風堂々とした樹風のゆえに、好んで宮廷に植えられたことから、たとえば「槐宸」といえば天子の宮殿を、「槐位」「槐庭」等は三公を、「槐門」は大臣の家柄を指すことにみられるように、一般的にきわめて高い社会的地位を、そして、ここで庾信が指摘する音律美も含めて、それにふさわしい諧和を表す詩的イメージとなっている。魏の文帝や王粲等の「槐賦」（『芸文類聚』巻八十八）に賛美されるそれも、まさにこのようなものである。これらの伝統的な槐のイメージを背景に、庾信は楽しい生命の律動を謳歌した、江南時代の幸福な日々を追懐するのである。それは多くの良き人々・自然・諸環境に囲まれて過ごした、いわば多くの良き時間の凝集体としての過去である。

しかし、本節後半ではそれが一転して、不調和で不安定なリズムが支配する現在へと変貌する。槐のすっくとそびえ立つ毅然たる姿は、通常はその上昇的垂直性のゆえに、人間の強い意志や高貴な節操といった内容を予想させるが、ここで庾信はそれを全く逆転させて、上昇の反対の自己の墜落を詠ずるのに用いている。そうすることで幸より不幸への、極端な転落の悲劇を一層強調する表現が獲得されるわけで、ここにもまた一つの伝統を打破する、彼の斬新な芸術的手法が発見される。心身ともに危機に瀕する中で、庾信は「華亭の鶴」「明月峡の野猿」の発する哀切な鳴き声を想起する。それは庾信自身の慟哭に外ならない。

第三節にいう（脚韻：覆・伏・蹙・目）、

この木の　様子は　と見れば
節くれだち　曲がりくねり
でこぼこ　ごつごつ
熊や　虎も　恐ろしげに　遠くより振り返り
魚や　龍さえ　おびえおののく
木の幹の　縦には　四角い　山形の連なり
横には　波立つ　水の　波紋
（木を切り倒し　彫刻すれば）

いかな　名工らも
いぶかり　目を　見張らん

老木となった槐の奇怪なイメージを、様々に連ねているが、庾信自身の屈服後の非常に鬱屈した精神状態をいうものと解される。槐は実際にはそれほど節くれだつものではないらしいので、右の表現は彼の内面世界の風景と考えられる。次に、注意されるのは、木の文様についての描写で、これが彼の心の中の複雑な波紋を象徴するのは、一目瞭然であるが、以下の第四節も併せてよく考えてみると、どうもそれだけでは不足の感がある。つまり、次節では名工が強い意欲をもって取り組むような描写がなされており、そのためには、工人側からみて、それが強い魅力を感じさせるものでなければならない。ところが、本節に表現するものは、逆にその意欲を減退させるような、複雑な波紋の模様となっているのである。この槐の木目の審美性についての疑問が解けず、そこである専門の木工の芸術家に尋ねてみたところ、槐は硬い材質だがその木目がきわめて美しく、その模様を利して、古来優れた工芸材として用いられてきているとのことである。とすると、槐自体はやはり名工らの腕を振るわせたくなるような、きわめて良質の材料であるわけである。材質的にはきわめて美しい模様であるのを、庾信は反対に反美的価値として取り上げていることになる。では、その意図はどこにあるのだろうか。

第四節にいう（脚韻：加・牙・花・霞）、

さて　のみが　ふるわれ
それに　小刀も　加われば
魚の鱗は　平かに
亀の甲らは　削られ
麒麟の角に　象の牙
重なり合える　錦の小紋に
一面の　芳しき　花びら
草木に　乱れ繁り
霞の　辺り　一帯にたちこめる
（そんな事態は　ありえぬ）

ここは、彫刻の名工らが懸命にノミや小刀を振るい、見事な動植物の模様を刻んで、この材料を豪華な調度品に仕上げんと意気込むことをいおう。この材質には、それだけの価値があると見ての努力であろう。ここまで読解してきて、槐は庾信自身の比喩として一貫していると考えられるから、とすれば、名工とは、彼のかたくなな心を解きほぐし、もっと西魏への理解を深めてもらうための、条件整備工作に当たっている西魏の人間を指すと考えられる。では、西魏からみて、庾信にはどんな価値があったのだろうか。思うに、梁朝の門閥貴族制のシンボル的存在ともいえる庾信の帰順は、忌まわしい侵略の悪夢に一応のケリをつけ、新しい未来に向かっての前進を天下に示せ、その機運の高まりをはずみとして、中国統一の混戦レースに有利な地歩を作るのに有効だったのであろう。西魏にとって、そうした庾信の存在は、うまく運べば今後の高い貢献が期待されるという意味で、まさに槐の美しい木目そのものであったろう。他方、庾信は自分のおかれた立場は当然理解していたはずで、多大な犠牲を出した祖国の滅亡に対する整理もまだ十分についていない段階では、かなり抵抗が強かったろう。換言すれば、この頃の庾信の西魏理解は、いまだ浅かったといわねばならない。したがって、でこぼこでごつごつした老木に、ノミや小刀が当てられても相当の摩擦が生じ、首尾よくはいかぬことを、庾信は予想するのである。槐の美しい木目が、

この両節で美的・反美的と正反対の観点から描写されるのは、こうした西魏対庾信の複雑な葛藤を反映するものではないか、と推測される。

第五節にいう（脚韻：遷・年・焉・穿・烟）、

左思の「呉都の賦」にいう
松や　梓に　檳榔
銀杏に　サルガキらは
うっそうと　緑を　茂らせ
彦生えの　次々と　芽生えける
彼らは　千年の命を　全うせるもの

また　始皇帝により
五大夫に　封ぜられし　松の木
後漢の　馮異の　坐せし　大樹
（これらは　その名を　千年の後に　伝えしもの）

彼らとて　長年月を　経れば
苔の埋め　キノコの　覆い尽くし
鳥の　ついばみ　虫の　穿たざるはなし
あるは　霜や露に　凋れ
あるは　風やもやに　いたぶらる
（それでも　やはり　彼らは　幸せなり）

この第五節及び次の第六節は、いささかその表現の意味を解しにくいほど、古典的教養を散りばめた箇所だが、これらの前後の表現とよく突き合わせて検討するに、おそらく第一節の前半部と同じように、再び幸福な樹木のイメージを様々な形で詠出し、これらが自己の現在の苦境と比較にならぬことをいおう。すなわち、平穏な生涯を終え長寿を全うしたもの、および社会的に大きな名声を残したものの例を掲げ、いかなる樹木も最終的に死を免れるわけではないが、次節に詠じられるように、死して名をとどめる場合もあるのである。そうであれば、その死は己と比してきわめて自然な運命の結果なのであり、したがって、それでもなお幸福な生涯といわねばならない、というのであろう。

さらに第六節にいう（脚韻：社・冶・馬・下）、

（生命は　限りあれば　いつかは　死する定めなるも）
東海の　黄帝の娘の　「白木」の廟
西の方　黄河には　「枯桑」の社
北の地には　「楊の葉」　と名づけし　関所
南には　「梅の根」　と呼ばれし　精錬所
（これらは　地名とともに　生き続けるもの）

また　『楚辞』「招隠士」に　詠われし　「桂樹」の
その珍しき　群生ゆえに　人々を引き留め
晋の劉琨の　「扶風行」に詠う
「長松」の　馬を　つなぎ止める
（これらは　詩句とともに　永遠なるもの）

さらに　細柳の上に　臨める　城
桃林の下に　たたずめる　塞
これらは　もはや　一例には　あらざりき

この節では、東西南北の地名に冠せられたり、詩句に止められたりして、後世に伝えられた幸運な樹木のケースを掲げる。こうした豊かな教養を次から次へと披瀝する庾信に、北朝人はある種の距離と同時に、江南文化を担った彼ら貴族の深いパーソナリティを感じたのではないか。右の樹木のような例は特殊なものだが、「細柳の城」「桃林の塞」となると、どこにでもある平凡なケースで、もはや特筆されるものではない。しかし、そうした平凡なものまでが、己と比べれば幸運な樹といえる、と庾信はいおう。すなわち、程度のきわめて軽い例との対比を通して、自己の悲劇をよりきわだたせんとする、芸術的比況表現として理解される。

では、現在の庾信にとって、樹木の、すなわち人間の幸・不幸を分かつ根本的な基準とは何なのか。第七節を見てみよう（脚韻：絶・別・血・節・折・裂・穴・孽）、

（これらに比して　わが槐の　不幸なことよ）
祖国の山河より　遠く隔てられ
異境に　落魄　離別せる
その根を抜かれ　涙を流し
その根を傷つけられ　血をしたたらす
虚ろな　木の洞に　火を入れられるや
苦しげに　樹液を流し
節は　ついに絶たる
洞穴の前では　なお斜めに　横臥せるも
山の中腹に至りて　ついに真二つに折れり
そして　文様の　斜めに連なり
百抱えの　太さなるも　氷のごとく　砕け
木目の　真直ぐにして　高さ千尋なるも
瓦のごとく　裂けてけり
至るところ　こぶだらけ　穴だらけ
その異様さに　木の妖怪どもの
妖しげな　眼を　光らせ
山の精も　おどろおどろしく　現れけり

この節は、全体的に庾信の転節後の深い苦悩を、かなり明確に述べた部分である。まず最初に、彼が何故それほどまでに、自らを不幸とみなすのかというと、他の樹木と違い、根を抜かれ移されるという、その生を支える根本的な基盤の喪失という点が指摘される。それまでの生存を成立させていた価値体系が崩壊し、一定の秩序と統合を心の世界から失った彼は、もはや何のために生きていくのか、何を求めれば良いのか分からなくなり、支離滅裂となるほかなかったのである。

ところで、この節中には、枯樹に託して彼自身のことをいう比喻表現が、かなり明瞭に読み取れる。「火を入れる」（火入）のは、まさに拷問に等しい屈服の要請であろうし、「樹液を流す」（膏流）とは、それを忍ぶ苦悩の脂汗であろうし、「節を絶つ」（断節）は、梁への変節に相違あるまい。また、「横臥」（横洞口而欹臥）は、西魏への不服従の抵抗の様子を、「山の中腹」（山腰）は、苦しい戦いを途中まで続けてきたことを、「真二つに折れる」（半折）は、つまり降伏をいおう。さらに「木目の真直ぐなる」（理正）とは、彼の平生の貞節で「儒雅」な生き方を、「文様の斜めなる」（文斜）は、比喻の対象を定めがたいが、おそらくは教養豊かで「風流」な、江南人としての自己表現かと思われる。これらの巧みな比喻表現の技法にも、江南貴族が努力を傾注した教

養の一端がのぞかれよう。最後の異様な玄視的世界は、暗闇のどん底に突き落とされ、生存目標を失い、不安な中で過去への後悔や怨恨の思いにかき乱される彼の心の奥深くで、勝手に暴れ回る魑魅魍魎の類をいうのではないか。

第七八節頃より、賦は直接庾信自身のことに深く言及するようになる。

（脚韻：帰・薇・扉・衰・悲）

まして　梁朝復興の　風雲の機に　乗ずることなく
羇旅の身として　帰国できぬとは
わが　慙愧の　いかばかりなるか
未だ　外交使節の　命も果たさぬに
かえって　この地に　禄を食むことになりしとは

わが身は　この窮巷に　沈倫し
荊扉に　蕪没せる　日々
すでに　わが揺落を　傷めるも
さらに　変衰せるとは　嘆かわし

かの『淮南子』に　いえる
「木の葉　落ちて　長年　悲しめり」
とは　まさに　この謂いなり

本節に至り、一部分だがそれまでの槐と自己との主客混然となった幻想的な芸術表現を離れ、庾信自身のことが直接前面に出てくる。すなわち、梁の復興をかなえられず、使命も果たせず、敵国の禄を食む身への、強烈な自責の思いの吐露である。しかし、こうした意味の平明な表現はごくわずかで、すぐまたこの作品本来の槐との一体化表現に帰し、その揺落と衰老をもって、賦は一応の叙述を終えるのである。以下の二節は、本賦を締めくくるにあたっての庾信と宇文泰の短い感想なので、槐に擬した自己の道徳的墜落、それによる心身的な衰残の表現は、ここまでである。冒頭部に戻って作品を読み返してみると、庾信と槐の混然とした表現は、第二節より数えて合計七段に及ぶ、かなりの長さを構成し、かつ作品の主要な部分になっている。しかも樹木をめぐるイメージが複雑に絡み合うため、原作の意味はきわめて取りにくい。それらは庾信の錯綜する心と深い煩悶の跡の、そのままの芸術的形象化を意図した結果なのでもあろう。

第九節は、庾信の最後の感懐である（脚韻：槎・花）。

そこで　歌えるは
「赤眉の乱の折
漢の　建章宮の
三月も　燃え続け
のち　黄河に　万里の　筏を浮かべ
はるばる　長安への道を　たどりける

今は　うらぶれしも
もとは　晋の　富豪　石崇の
金谷園に　茂れる　万本の柏か
はたまた　潘岳の
街一杯に　咲き乱るる
桃の花なるか」と

「赤眉の乱」が、西魏軍の侵攻を、「漢の建章宮」が、江陵府を指す

のは明らかである。そして次の詩句は、十万余の梁民の長く苦しい長安への連行の旅路をいおう。この箇所を読むに、庾信の深い罪責の念が、単に彼個人の胸中の出来事としてではなく、全ての旧梁民・国家との連帯関係の全体に対して、向けられたものであることが察せられる。激動の南北交代期には稀な庾信のこの徹底した倫理的姿勢こそ、庾信が江南の門閥貴族制の政治理念の原点を象徴する、最後の証人たる本質的理由でもある。歌の後半は、再び樹木のイメージにと立ち返り、古人の栄華の逸話に関わる柏と桃を取り上げ、己の悲劇としての現在の枯れ槐とが比べられる。この柏は、堅固な貞節の、また桃は、若々しさや繁栄のシンボルであるが、今の庾信はこれらの一切を喪失してしまった、というのである。

樹木は、元来意志的に感じられるその上昇性、また季節により変化するその色彩や形状、およびその栄枯的な表情など、人間的に感じられる様々なイメージを持ち、ために人間の側の心情を投影しやすい存在である。中国の古典には、このような自然への深い没入感・一体感を持つ東洋的な文学的表現として、松柏・柳桃・竹梅等がしばしば詠じられるが、一本の樹木を題材にしたものとしては、この「枯樹賦」ほどの美文調で、かつ人間的な深い眼で、本格的な芸術的趣向をも併せもつ長編の作品は、おそらくそれまでなかったのではないか。また、ニーチェが松や樅の木に、人間的な眼でその強い意志や虚無の深淵を捉えたことは、知られるところだが、[8] 庾信にそれとある面で類似する詩のあることは、豊かな中国詩学の構築上、今後もっと注意されてよいだろう。

ところで、最後は、宇文泰の庾信への同情の辞らしき表現で結ばれている（脚韻：南・潭・堪）。

大司馬桓温　そを聞きて　嘆息していいける

「昔　植えし　柳の木
漢水の　南に　茂れるに
今　揺落し　江べりに　うら悲し
樹すら　かくのごとくんば
人の　何ぞ　堪えられん」と

この桓温の設定は、本章の冒頭で述べた「仮設」に当たるが、それが全くの虚構であることは、彼が殷仲文よりも三十年余りも前に死んでいることからも分かる。では、ここでそれでもあえてなぜ桓温でなければならなかったのか、を考えてみよう。まず、彼の経歴についてみてみると、荊州刺史となって以後、江陵を拠点に東晋の有力な武将にのし上がり、蜀の成漢国を滅ぼしその領土を東晋に組み込み、さらには江陵より兵四万を率いて北征し関中の奪回を目指すなど、まさに大司馬にふさわしく南北朝の統一をはからんとするような、スケールの大きい活動を展開した人物である。このことと大冢宰として西魏の行政の中枢にあって、梁を滅亡に追いやり、その後の江陵に自らの傀儡政権としての後梁を樹立させ、将来の中国統一に意欲を燃やした宇文泰の行動パターンは、かなり共通性を持つ。これが第一の理由として考えられる。

次に、桓温は優れた武将であったばかりでなく、『世説新語』に多数彼の事跡が記されるように、教養豊かな文人でもあった。その「言語」篇の第五十五節に、江陵より北征し、途中金城なる地を経た時、以前植えた柳の木が見事に成長しているのを見て、「木すら猶お此くの如し、人、何ぞ以って堪えられん」と、歓喜の涙を流したという話が載っている。つまり、めざましいほどに功績を上げた人物の、大木になった柳に触発されての感涙なのだが、その大成者としての樹木と人間の二重像が、敗北者としての庾信と枯れ槐の場合と実に好対照をなすことに気づかさ

れよう。したがって、前者のイメージを借りて勝利者としての宇文泰にあてはめると、自分の境遇との違いを際だたせることができる、という芸術的手法があろう。これが第二の理由である。

そうした上で、この桓温＝宇文泰が史実とは異なる、一つの創作をする。それが「昔はあれほど茂っていたのに、今は揺落してしまった」という、見事な成長をいう原話をもう一度裏返した、そして同時に、今の庾信のおかれた現実をいう言葉でもある。その後で例の「木すら猶お此くの如し、人、何ぞ以って堪えられん」という発言を、宇文泰はしているわけだが、とするとこれは、宇文泰の庾信への単なる同情の表現なのではなく、勝者と敗者の立場の互換という「仮設」を用いて、人間誰しももしこのような苦境に立ち至ったならば、そういう心情は理解されるという、より深い気配りを含んだ理解を庾信に示した表現のように受け取れる。

以上、「枯樹賦」の内容を分析してきたが、この詩の創作背景に関して、さらに二点上げておきたい。まず歴史的に見て、[9]南北両朝に分裂して以来、各々異質な道を歩んで来たものの、悲劇的な急展開の末の南北部分統一の実現によって生じてきた相互矛盾―門閥貴族制国家と郷兵・府兵制国家―の衝突、という側面があるだろう。しかも、梁の滅亡により南朝の南朝たるゆえんだった貴族の系譜は完全に途絶してしまったから、もはや「南朝」の復興もなくなり、したがって自己の存立基盤を完全に喪失してしまった、という状況がある。歴史の趨勢は、時間の経過につれ身分格差が不当に拡大し、腐敗しやすくなるこの門閥貴族制を過去の遺物視し、郷鎮の民衆の健康的活動や自由なエネルギーを基礎にした、新しい「開かれた貴族制」的世界の建設に向けて意欲的に展開しつつあった。そういう意味で、この作品は、江南貴族制の死を深刻に描いた貴重な文学的事件といってよかろう。

次に、庾信個人の視点に限ってみると、彼はその家柄について、「七世にわたり秀才を挙げ、且つ珪のごとく且つ璋のごとし。五代に文集あり、貴族の華望盛んなるかな」（滕王逌原序）と、称えられるように、江南の貴族制社会のいわば華ともいうべき人物で、自身その「風流儒雅」であることを、何よりも誇りとしていた。それが彼の生きる「足場」であり、また目標であった。全ての貴族が、この「風流儒雅」という教養主義的人格主義を完全に自己実現することが、理想の世界の具現につながると、そう固く信じていたのであろう。それが哀しむべき政変によりかつ全く違う環境に移されたことで、この価値観は消滅してしまうのである。

北朝は、南朝貴族の教養主義の弊害として、その柔弱さ・驕慢さ・浮華ぶりを軽蔑するような土地柄だったから、彼は強い自己否定の苦しみに襲われねばならなかった。したがって、その虚無から解放されるには、改めて自己の本質的価値としての「風流儒雅」の長所を見直し、かつ今日の苛酷な現実を直視した、いわば教養主義と現実主義の双方を合わせ持った性格の文学を必要とした、と考えられる。それがこの「枯樹賦」制作の背景にあるため、その原文は、深刻な現実を表現しながらも、古典的教養を駆使した修辞で埋め尽くされる結果を生むのである。しかし、六朝の賦の一般的な特色である、抑制をベースにした華麗・荘重といった傾向はここにはもはや見られず、それがそれまでの伝統を打破した斬新なものであり、中国古典の表現上の一つの発展であることをも伺わせる。

ともかくも、この「枯樹賦」における教養主義＝修辞主義のスタイルが、体制崩壊期における巨大な無化作用に対する、伝統文化側からの懸命の反論としてあり、その両者の激突の中から新しい生命が誕生してくるという過程は、中国文学の表現史上繰り返される、修辞主義と現実主

義の相克の一典型として注目される。この彼の反論が、北朝で一定程度正論になるには、政権の安定化につれて南朝の貴族文化の吸収に努めるようになった、北周の明帝・武帝の登場を待たねばならなかった。が、この問題については、また機会を改めて論ずることにしたい。

個々の矛盾が時代の大きな潮流により一つに集合するようになると、歴史的な体制の崩壊に発展することがある。それは人間の心の価値観を根底から破壊し、それとともにそれまで力を持っていた伝統的な諸力が解体してしまう。その一つに文学上の形式もあげられるが、人々の多様かつ複雑な心を捉えきれなくなったものは、たちまち永遠に止まぬ時間のはるか後方に押しやられてしまう。こうした文学と歴史の宿命的関係を思うとき、一つの感慨に襲われる。すなわち、南北朝の末期という一体制の終わりにあたり、天は一人の典型的な人物を選び、彼が悲嘆・苦悩の淵に沈み、果てしない混沌を抱えた時に、それ自らを素材に、彼をしてノミを振るわせ、歴史の流れによって滅びていった世界・体制・人間等の、いわば廃虚の美をこの「枯樹賦」に結実させ、世に送り出させたのではなかったか、と。漢より六朝にかけて、盛んに行われた美文的「賦」は、この庾信をもって一応大きなエポックとすることができよう。

第三章　転節の苦悩より歴史的視点への止揚
―「擬詠懐」「擬連珠」詩における―

庾信の転節の苦悩はきわめて深く、「枯樹賦」とほぼ同内容のことが、他の作品にもいろいろ描かれている。そこで、もう少しこの問題を検討してみることにしよう。まず、「擬詠懐」詩から探せば、其二十一を掲げることができる。

たちまち　世の変わり
世の中は　混沌とせる
己は　敵国にあり　讒言を避け
どうにか　生きながらえける
祖国の　恩情も　忘れ
ついに　異朝の　禄を食む
愁いの余り　揺落せるは
心中　志しと　違えばなり
一人悲しみ　生気も尽き
空しく　驚く　槐の
かくも衰えけるかと

ここで「異朝の禄を食む」とは、西魏の最初の官を屈辱の中に呑んだことを指そう。しかし、それが彼の「中心」と「違う有り」というように、望まぬ選択だったために、彼は平生の自己の理想を自ら裏切る、反政治倫理的行為を犯したことに苦悩することになる。そして、「枯樹賦」に詠われた、槐の異常な衰老がここでも詠出される。

また、「擬連珠」詩中に、同内容の作品を捜し求めると、まず其二十七に次のように詠じられる。

けだし　聞けり
「齢　五十に　ならんとすれば
壮んな意気も　久しく　尽き
憂いは　人を　傷つけ
そのゆえに　悲しめり」と
されば　そを　交譲の樹に　譬うれば

西と東と　一年おきに
半ば死し　半ば生けるがごとし
また　かの　龍門の桐に　譬うれば
高さ　百尺なるも　枝なく
あたかも　死するがごときなり

ここでは、「交譲の樹」「龍門の桐」が、自己の死するにあらず、生けるにあらざる状況を象徴する。特に後者は、「枯樹賦」の冒頭部（五頁下段）にも登場しており、両作品の共通性を明確に示している。また、この「交譲の樹」「龍門の桐」をそのまま用いた別の例が、前述の「慨然成詠」詩の、

交譲未全死　交譲　未だ　全くは死せず
梧桐唯半生　梧桐　唯だ　半生

であることはいうまでもない。

ところで、この「連珠」の表現形式だが、基本的には二段からなり、前段では普遍的命題や道理を掲げ、ついで後段でその内容を演繹・帰納・推理などをすることにより、より具体的な事柄に即して結論を述べる、というスタイルになっている。今、前段にいわれるのは、注釈に記されないが、おそらく漢の武帝の有名な「秋風の辞」の、「歓楽極まりて、哀情多し。少壮幾時ぞ、老いを奈何せん」を意識しよう。沈海燕氏は、[10]庾信の連珠がほとんど全編典故で構成される点を、従来のものと比して重要な特色であると指摘されたが、それはまさに本稿でしばしば強調してきた、庾信の教養主義的貴族のあり方を示すものともいえよう。この時武帝四十四歳(元鼎四年)、周知のように二十年に及ぶ西域への壮大な領土拡張政策も、実際に獲得したのは不毛の荒れ地のみで、さしもの武帝にも衰えがしのびよるようになってきた頃の感慨である。作中にいう「五十」は、この四十四歳の概数でもあり、また人生の半ばを意味する修辞表現でもあろう。[11]ただし、あまり武帝の故事を強く意識せず、ごく簡単に世間一般にいわれることとして受け止め、それと庾信自身の覇気の衰退との比較と見ることもできるかもしれない。ちなみに、もしこの「擬連珠」其二十七も、「慨然成詠」や「枯樹賦」と同じ頃に書かれたとすれば、この時庾信の年齢もちょうど四十四歳であったことになる。ともかくも、こうした自他の比較を繰り返し、自己の経験を長大な歴史の時間の中に置き、改めて己を振り返って見たことは、自己の悲しみに埋没せず、巨視的な眼で今の己の置かれた状況を把握する上で、きわめて重要な作業であったと思われる。

「擬連珠」にはもう一例、「龍門の桐」が詠われる。其三十一で、

けだし　聞けり
「十軒ばかりの　村にも
忠信の士はおり
五歩の内にも
芳しき草は　摘めり」と
それゆえに　日南の　干からびた　蚌の
なおも　明月の珠を　含み
龍門の　死せる　桐の
なおも　「咸池」の楽を抱く

この引用部の前半に引かれるのは、『論語』公冶長篇の「十室の邑にも、必ず忠信有り」であるが、さらに後半の「五歩…」も含めた表現に近い

例としては、のちの漢の『説苑』巻十六「説叢」、『潛夫論』巻十四「実貢」に、ほぼそのままの形で見られる。これらはいかに偏僻・微小な所にも徳の遍在することをいおうが、庾信はそれを歴史を貫く普遍的真実のあり方と認め、さらにその表現を転じて、いかなる状態の中にも自己の徳の不滅なるをいわんとする。すなわち、「日南の枯蚌」「龍門の死樹」に託して、苦境の中でもおのが真実を貫かんことを述べ、歴史的普遍性の高みに自ら連ならんとするのである。それは個人的体験の深い精神化により、[12] 個人の時空間を超えて、歴史に結ばれた視点への遷化を意味しよう。このような庾信の表現形式の中に、我々は「古人の清高な人格に対し、…矮小な自我の主張者、…自己の人性の汚濁」（谷川氏）[13] を照らしみることにより、強い虚己の精神を堅持せんとした、六朝貴族人のあり方を明確に発見することができる。

それは歴史的視点への止揚と認められるが、それを最も端的に表す事例を掲げるならば、これまでしばしば繰り返されてきた「龍門」がそうであろう。庾信は右例のほか、「傷心賦」では、「龍門の桐は、その枝已に折る」と、また「小園賦」中でも、「骨を龍門に曝す」と述べており、「龍門」への彼の特殊な感情の程が感じられる。それをさらに明言したのが、「信、生まれるは、龍門に等し」（哀江南賦」一四一・一）である。つまり、「龍門」に生まれた漢の司馬遷に、自己の生涯との類似を感得しているのであり、それはたとえば司馬談―遷、庾肩吾―信の父子関係、またその歴史家―文学者の対比、そして司馬遷と己の悲劇的運命等々いろいろな形において現れている、といえよう。

司馬遷への庾信の深い思いを感じさせると、読解することができるものに、たとえば、「擬連珠」其二十三がある。

けだし　聞けり

「心の　屈折し
抑鬱状態の中に　落ち込めるとき
たちまち　無情の　心に　感じ
あるは　孤独感に　苦しめる」と
されば　怨嗟を　含める　水は
憤りの　泉となりて　結ぼれ
悲哀を　帯びし　雲の
ひとえに　愁いを　ただよわす

ここにいうのは、たとえば司馬遷の例の「任少卿に報ずる書」の「ここをもって抑鬱し誰とも語る無し。…僕これを聞けり〈悲しみは、心を傷ましめるより痛ましきはなく、行いは、先（＝先祖）を辱めるより醜きはなく、詬（＝恥）は、宮刑より大なるはなし〉と。」（『漢書』司馬遷伝）などの先人の悲劇的体験を踏まえてであろう。このような例はかなり多いが、庾信は特に自己との共通性を感じさせる、司馬遷の当時の屈辱に思いを馳せ、それよりする彼の「発憤」の生涯に、自己の一つのあり方を見て取っていたのではないか。このように考えてくるならば、「哀江南賦」はまさにその実践であった、と思われる。

また、司馬遷の屈辱感との激しい格闘の姿勢を一基準に、自己を省みたのではないかと思われるのが、「擬詠懐」詩　其二十の、

人は　死を選びても
なお　屈辱に　耐えるべきもの
辱められて　何ぞ　心寛く　生きられよう
古え人の　かくのごとき　気概を　思えば
何ぞ　心安く　生き得べし

わが面の　慙愧の余り　赤面し
心ぞ　とこしえに　薄ら寒し

で、司馬遷自身は激しい恥辱の念に苦悩しながら、死よりも結局は生きて歴史の真実の記録者たらんとの道を選ぶわけだが、その屈辱をバネにした強靱な使命感的態度は、庾信のこの時の一典範となったであろう。

ここで庾信のいう恥辱の念とは、中国の長い歴史的過程を経て作り上げられた、文人の一つの道徳的理想像に準拠して、それを実行できずにいる現実の自己に対する劣等視への現れとして、捉えることができよう。しかし、その一方で、現実には南北朝のあの激しい王朝交代期に、己を極端に劣等視し、過去の名誉の消滅を恐れ、節に殉ずる者などきわめて稀有であったことは、従来すでに指摘されている所である。[14] 早い話、庾信の同時代人の王褒がその代表的な例である。彼は、「（西魏の宇文泰の）釣船に坐する（出仕する意）を妨げる無し」（庾信「傷王司徒褒」詩）と、ほとんど何の抵抗もなく、西魏に転じている。もう一人、同時代人を掲げるならば、かの顔之推がそうである。[15] 彼に至っては、偶然二度の亡国に遭遇し、梁―北斉―北周・隋と、異なる体制の国家を三度も変えている。こういう興亡の激しい時代では、主従関係の恒常性は難しい面があり、殉節という絶対的忠義は支配者側を喜ばせはするが、政権そのものがきわめて不安定なだけに、多くの貴族・官僚にとっては現実には余り深い精神的な意味を見いだしにくかった、と考えられる。彼らが知識人としての責務を果たそうとすれば、殉節という空無的な態度ではなく、むしろその豊かで厳密な教養・学問を背景に、過去の悲劇を無にせず、今後のあるべき社会形態への建設的な提言をなすことの方が、より意義のある行為として受け止められていたと思われる。

では、顔之推や庾信の恥辱感の奥で、どのようにして自己の劣等視からの脱却がなされたのだろうか。それは、一応次のように考えられよう。彼らの修得した学問を通して得た歴史的視点によって一層強められた恥辱感が、さらに一層の「自己へのかえりみ」現象（シェーラー）を生み、そのことでますます歴史的普遍への探求心が強化されるという、いわば両者が止揚しながら高まっていったことで、この精神的危機からの解放が果たされているのだ、と推測される。このシェーラーは、従来の哲学が、この種の羞恥を未熟な精神の現れとして消極的に理解してきたのを否定し、それはより高い存在への志向をはらみつつも、それが実現しない時に生ずる感情であり、この羞恥を経て人は精神の高みに誘われると、反対に積極的に解釈した。その意味で羞恥の問題を初めて意識下の深層にまで掘り下げて解釈した画期的な思想家とされる。ただ洋の東西で、この精神的高みの実体を指す内容となるものが異なるが、一応普遍的真理を指すこととすれば、庾信の場合もこの解釈は成り立つ、と私は思う。

ある人は、自己を劣等視する余り、自己毀損としての死に至る場合もあるが、またある人は、これを機に自己の内部に普遍化への情熱をかき立てることで、その恥辱の受容と引き換えに、次の世界を道徳的死滅から解放せんとする強い意志を持つ。司馬遷や顔之推・庾信の場合は、無論後者に属す。ちなみに、現代中国における中西比較文学の第一人者朱光潜氏は、[16] 例のアードラーの劣等感（コンプレックス）論を引き、中国史におけるその典型として、左丘明の『国語』、孫子の『兵法』、司馬遷の『史記』等を指摘される。これはこれで興味深い比較ではあるが、庾信の場合は、より正確には、劣等感論としての例というよりは、やはりシェーラーや後述する谷川氏の当時の貴族の学問のあり方についての見解などに沿って、解釈した方が適切であろう。

すでに別稿で述べたように、[17]「哀江南賦」は、歴史の微細な諸事実の網羅を通して、さらに個々の事件の時空を超えて有する普遍的真理をマ

クロ的に追求した『左伝』『史記』等の書に倣い、梁朝滅亡の真因に迫ろうとしたという一面を持つ。この中で、庾信はその内因としては梁武帝の政治の弛緩、及び江陵府の道徳的衰滅などを重視する。それに外因として、侯景や西魏の侵攻などが重なってくるわけだが、それらの総合的結果として、「ああ、山嶽の崩れ落ちるは、すでに定まった滅びの運命の結果なのだ」（「哀江南賦」序）という、一つの悲劇が帰結されてきた、と認めている。

庾信が、この時期天の意志の那辺にあるかを懸命に探らんとした様子は、父肩吾の「人事、今かくのごとし。天道、誰とともにか論ぜん」（「乱後、行きて呉の御亭を経」詩）を、おそらくは「遺訓」（「哀江南賦」一四一・一―許逸民本頁・行数、以下同）と受け止め、「ああ、天保の未だ定まらず、…書を成すの顧託を（父より）受く」（同、一四〇～一四一）、「天、何すれぞ、この酔いをなす」（同、一六五）、「天道、あるいは問うべくも、微にして言に忍えず」（「擬詠懐」其十二）等の表現に見て取ることができる。天や歴史といった巨視的な視点に立って、自己を「かえりみ」ることで、庾信は己もそうした大きな流れの中に立つものとして、改めて自己の存在を捉え直す契機を得、そこから生まれでた新たな歴史的責任と使命の自覚が、彼を「龍門の桐」という精神的な死から生へと転回させてくれたのではないか。

シェーラーはいう、[18]「悔恨は、個人の内面的な出来事であるばかりでなく、根源的には社会的＝歴史的な全体現象である。総体罪責に対する総体悔恨、それは道徳的存在の再生を準備し、歴史的過去を光にさらし、未来を明るい可能性の構想に広げて行く意味を持つ。」「道徳的死滅からの更新・解放を求めて、将来を志して喜ばしく力強く努力することは、悔恨の大きなパラドックスである。」と。これと同じことを、中国の六朝貴族に関して説明されたのは、やはり谷川氏で、[19]「古人の徳行の事蹟によって照らし出された、自己愛に跼蹐するおのれの醜い姿の自覚」が、「強い悔恨の情と共に自覚され、そのような回心をテコとして、実践への決意が生まれる」[20]と、指摘された。魯同群氏による庾信作品の制作年代の考証によれば、庾信はこの時期集中的に多くの作品を書き著したと考えられるが、それらは彼にとって右の主張をそのまま実践したものだったように、私には思われる。これらの執筆を通して、彼は歴史的視点に立って現在の自己を「かえりみ」、まさにシェーラーのいう「大きなパラドックス」に至りつつあったのである。

ところで、既述した「枯樹賦」制作の前後で、西魏人の対庾信評価が一変したという、興味深いエピソードが伝わっている。

> 梁の庾信、南朝より初めて北方に至るおり、文士の多く之を軽んず。信、「枯樹賦」をもって以って之に示すに、後に敢えて言うものなし。
>
> （『朝野僉載』巻六）

これについては、かつてその資料的内容に疑問が呈されたことがあるが、ここでは「枯樹賦」に関する北朝人の反応を伝える貴重な逸話として取り上げたい。北朝の文士も当代の著名な文人庾信のことは知らないはずがない。彼らが軽んじたというのは、その存在への無知の故ではなく、その華美で浮薄に傾く江南貴族の作風を、庾信も得意然と誇るだけの人物、と一面的な先入観で誤認されたためであろう、と私は考える。北朝人の武人的気質よりする、南朝の老博士的学問への侮蔑的傾向等については、すでに谷川道雄氏によって活写されるところである。[21]したがって、庾信といえどもこの類の徒に相違ないと彼らが思い込むのも、あながち無理なからぬ面があったといえよう。しかし、「枯樹賦」に初めて触れ、その深い憂愁や真率な心情の表現を見、また「枯樹賦」における、その

緻密な構造、多様なメタファー、およびリズムや音楽性等が、一定の芸術的真理と統一の下に表現され、またそれが諸方面にもたらす精神的現実的効果のあり方に、学問や教養を通して公的世界を秩序に導いて行こうとする、江南貴族の本質的な「精神（ガイスト）」を見いだし、[22]ようやく立場の相違を超えて、庾信に同情と敬意の念を寄せるようになったことを、この逸話は物語っているのではないか。

『朝野僉載』では、庾信が「枯樹賦」を北朝人に示したことが、この変化の契機となったと記されるが、この「枯樹賦」における文学と貴族制の政治的理念の関係自体は、「擬連珠」「擬詠懐」「哀江南賦」にも一貫して見られるものである。たとえば、「擬連珠」の特色を幾つか指摘するならば、[23]従来の連珠に比べ声律美をも追及し、きわめて美文的となり、かつ既述したように豊富な典故性を持つことなどが上げられる。これらはまさに右述した江南貴族の「精神」の具象化にほかなるまい。庾信の典故、すなわち「古典語＝非日常語」の多用の背景については、すでに別稿でも述べた所だが、[24]単なる文学上の修辞主義ではなく、古典世界におけるいわば永遠の聖性なるものを、言葉を通して絶えず現前化させることで、自己の内外の現実的汚濁に対し、それを根底的に歴史的尺度で見直し、改めて秩序化せんとの意図に発するであろう。このような学問・文学的認識は、六朝貴族のみならず中国史上いつの時代の知識人にもみられることかもしれないが、六朝時代は統治の基盤をこの貴族制そのものにおいており、後代のように多元的かつ有力な統治手段を有していなかっただけに、その持つ意味はきわめて重かったといわねばならない。

さて、北朝人のこの亡国の寄留者への理解が徐々に進んでいったとすれば、それにつれて庾信の方も、自ら西魏への態度に柔軟さが出てくることは想像に難くない。そして、やがて現に大きな変化が訪れるようになる。そのことを、「滕王逌原序」は次のように記す。

（庾信は）しばしば上国（都の意か）に聘（め）され、特に太祖（＝宇文泰）の知る所となる。江陵の名士のうち、惟だ信のみ、綢繆として（＝花が咲き乱れるほど華やかに）礼遇され、造次（＝太祖の死までの慌ただしい期間）なるも推恩せらる。

宇文泰の死は、五五六年十月であるから、庾信が最初の官を呑んでまもなく後の状況の変化ということになる。その死までの短い間に、庾信は旧梁臣の中で最も太祖の礼遇を受けることとなった、というのである。この滕王の記述と第一章で問題にした西魏での二度目の任官、しかも今度は二階級昇進しさらに高位に就くが、この二つの間には深い関連があるであろう。すなわち、「枯樹賦」の制作を経て、西魏人のまた庾信のお互に相手に対する態度には、かなりの変化があったようである。庾信の現実に対する前向きの態度への西魏の評価が、その二度目の任官を意味するのではないか、と筆者は推測する。

ただし、庾信自身は自己の罪責については、「遂に楚への操を忘れしめ、何ぞ但に周の薇を食まん」（「謹んで司寇淮南公に贈る」詩　建徳六年　庾信六十五歳）と、自ら述べるように、いつまでも放免できなかったようである。が、そういう庾信を寛大に受け入れ、積極的に朝廷に招き、過去の不幸によってもたらされた現実を基礎に、それへの償いという意味からも、今までよりももっと美しい世界の建設を行うべきであることなどをおそらくは主張し、それへの参加を強く要請したのは、やはり宇文泰その人であったろう。自責と帰順と、この二つの問題は、徐々に次元の違う別個の事柄になりつつあった。両者ともに、あるべき政治の理想形態を真剣に模索していたことが、矛盾を大きく包み込み、短

いながらに濃密な人格的触れ合いをもたらし、自ら「枯樹」と認めていた庾信をして、最終的に西魏に臣従させる決定的な要因となった、と考えられる。

第四章　庾信と宇文泰の交わり

この章では、庾信の「竹杖賦」「枯樹賦」等に登場してくる大司馬桓温と、宇文泰とは如何なる人物で、その死の前になぜ華やかな親交がなったのか、といったことについて検討してみよう。この庾信と宇文泰の関係については、従来の研究では未だ空白の部分だったと、思われる。しかし、両者の交流に関する具体的な記述が残っているわけではないので、ある程度間接的な論証にならざるをえない。

庾信の文集を調査すると、彼が宇文泰に言及した文章はかなり残存し、しかもきわめて好意的なものばかりである。それは後出することにするとして、まず宇文泰の人物について、ここでの分析に資する事柄のみを、『周書』文帝（宇文泰）紀より抽出してみると、彼は子供の時から既に「大志を抱き、家のなりわいを事とせず、財を軽んじ施しを好み、賢人士大夫との交わりを重んず」る人物だった。要するに、谷川氏の指摘されるような、当時の北朝士大夫の高い倫理的性格を、最も豊かに天より賦与された人物だった、といえよう。以後、彼の一生は北朝の動乱下にあって、戦乱に明け暮れていくことになるが、だからといって決して武人一辺倒ではなかった。多少の潤色はあろうが、どの記述もまさに文武の両道を兼備した理想的君主として描いているのである。

①北魏の末時に、関隴地方に発生した乱は、その地の人民をすっかり衰残させてしまったが、宇文泰は恩愛と信頼とを持って彼らに接し治めたので、人民は皆歓んで服した。そして誰もが喜びながら、「もっと早く宇文公に出会っていたら、我々も反乱には加わらなかったものを」と、いいあった。

②（北魏の最後の年、永熙三〈五三四〉年、春正月、賀拔公岳が、異心を抱いた侯莫陳悦の計にかかり、不慮の死を遂げた後）斉神武が長史侯景を派遣し、岳の管轄下の士衆の引き抜きにかかった。宇文泰は急いで安定という現場に急行し、侯景に会っていうには、「賀拔公死すとも、宇文泰なおあり。そちの何する所ぞ」と。景は色を失って「俺にはまだ矢がある。もし誰か射ようものなら、応戦してやるまでだ。誰が自決などしてたまるか」と。景はこうしてすぐに引き上げた。宇文泰が岳のためにいたく慟哭すると、将士らも悲喜こもごも感じきたり、「宇文公がお出でになったからには、もう心配はいらぬぞ」と、いいあった。

③（同じく北魏の永熙三年、夏四月）宇文泰の軍律は厳しく、少しもそれを乱すことがなかったので、人民は大いに悦んだ。識者は、彼の後の大成を確信したのであった。

④（西魏の大統四〈五三八〉年、八月）西魏の大軍が東伐するや、関中の留守兵が少なくなった隙をついて、この頃虜となって民間の中に散らばっていたかっての東魏の士卒が、謀議をして乱を企てた。これに乗じて趙青雀がついに長安の子城にそむくと、長安大城の城民はこぞって彼を拒否し、日々接戦を繰り広げた。西魏帝がこれに応戦させるべく宇文泰を遣わすと、長安の父老達は公の至るを見て、感泣して喜び、「今日、再び宇文公に見ゆることができるとは思わ

なかった」といい、士女達も互いに慶賀し合った。

②にいわれる侯景とは、五四八～五五二年にわたり、江南を蹂躙した例の「侯景の乱」の張本人にほかならない。宇文泰は、この梟雄侯景と敢然と戦い、追い払った経歴を持っていたのである。しかも以下の記述では、人民に敬慕されてやまぬ、仁君の風格を持った将軍として記されている。こうした話を庾信がもし聞いたとすれば、彼は宇文泰の中に、南北に分かれながらも、ともに同じ敵を相手に戦った戦士同士、という共通項を発見したこともあったかもしれない。また、右の諸例のように、宇文泰という人物は、つねに人々に深く敬慕される仁徳の持ち主であったらしく記されており、庾信も徐々にそうした彼の威厳に満ちた君主ぶりに接するようになったであろう。そして、次第にこの人物に抱いていた不信の念は、やがて少しずつ信頼の念へと変わっていったもののように思われる。

庾信は、宇文泰の仁君ぶりを、短期間ながらも幾度か間近に見て、そのことに理解を深めていったはずである。そうでなければ、あれほど多くの宇文泰礼賛の文章を書けるはずがないからである。彼が都で直接実見したであろう宇文泰の優れた政策の一つは、有徳かつ有能な人材の大胆な登用という点にある。いわゆる「賢才主義」の政策だが、外ならぬ、庾信自身がその政策の対象となったわけである。この政策について、後年の庾信の文中には、以下のような様々な実例が掲げられている。

○太祖文皇帝（宇文泰）は、天網を駕馭され、英傑を苞羅（＝たくさん集め）られ、公（＝長孫倹）の才徳を選ばる。

（「周柱国大将軍長孫倹神道碑」
天和四〈五六九〉年、庾信五十七歳）

○太祖文帝は、関都を締搆（＝守）り、夷阻（＝敵地）を経綸（＝治）め、携（＝友人）を招くに礼をもってし、遠きを懐うに徳をもってす。

（「周大将軍司馬裔神道碑」
建徳元〈五七二〉年、　庾信六〇歳）

南北朝末期に、実際これほどの有徳の指導者は外にいなかったであろう。王褒を初めとする旧梁臣らの早々の帰順も、中国史上の主従関係の通例から見て、これが大きな要因であった可能性がある。

次の文は、宇文泰による具体的な抜擢の場面を記したものである。

○（宇文公顕和は）彎弧を挽くこと強く、左も右もともに馳射すれば、故にその名を上谷（燕地）に得、その威は楼煩（趙地）に振るう。…太祖（溱水に至りし時）素より公のその名（声）を知れるも、未だ之れ（その技を）識らざるなり。…直ちに云う「この人をして水傍の小鳥を射さしめよ」と。その手に応じて即ち著（＝当）つ。太祖喜びて云わく「我、卿の名を知れり」と。即ち、用いて帳内都督・滄州諸軍事・滄州刺史となし、邑を増し前とあわせて二千五百戸となす。

（「周車騎大将軍贈小司空宇文顕和墓誌銘」
建徳二〈五七三〉年、　庾信六十一歳）

○太祖、同州（＝華州）に在りし時、文武を並べて集めて号令して云わく、「人々、紇干弘の心を尽くすがごとくんば、天下、豈に早く定まらざらん」と。即ち、車騎大将軍・儀同三司を授く。

（「周柱国大将軍紇干弘神道碑」
建徳四〈五七五〉年、　庾信六十三歳）

このように、庾信は宇文泰の大胆果敢な登用法を描いているが、それは宇文泰の既定方針として長らく実行されてきたものであった。その基になるのは、彼の片腕蘇綽が書き上げた、例の西魏の政治倫理の骨子たる「六条詔書」である。その中の第四条に、「擢賢良」があり、いわば官吏のあるべき理想像とその登用・選考法について述べられている。この理念は、[25] さらに蘇綽の死後、五五六年一月「六官の制」として制定化され、それまでの北魏の門閥貴族尊重の官制を明確に否定し、より自由な選抜制度を目指したものとして重要であり、また後の科挙制度の誕生に連なる進歩的なものでもあったのである。宇文泰はこれらの理念・制度を基礎に、古代的共同体倫理に深く根ざし、各層の民意を広く吸い上げ、胡漢共同による天下の統一に情熱を傾けた人物だった。その新しい政治綱領の理論と宣言が、志しを持った同時代の人々の支持を集めぬはずはなく、歴史の大勢はこの西魏の都長安を中心に展開しつつあったといってよい。このような状況のまさに真只中で、庾信は五五六年の初めごろ西魏に屈服、最初の任官から「枯樹賦」の制作を経て、やがて宇文泰の礼遇を受け、おそらくは二度目の任官があり、西魏の軍政の中枢「儀同三司」に迎えられたのだろうと思われる。

庾信の西魏・宇文泰理解は、かなり急テンポで進展していったものと考えられる。おそらく庾信は胸の奥深くに傷心を秘めつつも、新たな歴史の胎動自体には賛同を覚え、それを肯定する意志を芽生えさせたことと思われる。ここに、庾信の新生をもたらす「大きなパラドックス」がおとづれることになった、と考えられる。後年、庾信は太祖宇文泰に対し、幾度も賞賛と畏敬の念を込めて顕彰している。彼の文集より、それに関する資料を抜き出し、以下にその制作順毎に列記すれば、

①太祖文皇帝は、時に乗じ乱を撥（＝治）め、たちまちにして覇業あり。

（「周隴右総管長史贈太子少保豆盧公神道碑」天和元〈五六六〉年、　庾信五十四歳）

②太祖文皇帝は、たちまちにして関河を有され、天下に行わしむるに君（莫陳道生）の幹略（すぐれた才略）をもってし、之をその爪牙に委ぬ。

（「周驃騎大将軍開府侯莫陳道生墓誌銘」天和五〈五七〇〉年、　庾信五十八歳）

③太祖、函谷を封じて諸侯を待ち、鄴宮に坐して群后に朝す。

（「周大将軍襄城公鄭偉墓誌銘」天和六〈五七一〉年、　庾信五十九歳）

④我が太祖文皇帝は、国を体し野を経め、官を設け職を分かち、魏を変じて周と作せり。風を移し雅を正して、（麗々しき）衣装もて万国を朝せしめ、珪璧もて諸侯に会す。

（「賀新楽表」建徳二〈五七三〉年、　庾信六十一歳）

⑤太祖文皇帝は、危うきを扶け難を済いたまい、たちまちにして関河を有す。されば臣、じつに堪えるなく、中涓（官名）もて従事せり。

（「為閻大将軍乞致仕表」建徳二年、　同右）

⑥太祖は、危うきを扶け傾くを済い、夷阻（＝敵地）を経綸（＝治）め、君の恥（＝賀拔岳が平涼で、侯莫陳悦に斬られた事件）を報い、遠く平原を襲う。

（「周太子太保歩陸逞神道碑」

建徳二年、　同右）

⑦太祖文皇帝、始めて覇功を創し、初めて王室に勤め、馬に秣かい乗（＝兵車）を閲し、衆にむかい太原にて誓いせり。

（「周柱国大将軍紇干弘神道碑」
建徳四〈五七五〉年、　庾信六十三歳）

⑧太祖は（高歓の）乱を撥（＝治）め、（一度は）君（＝孝武帝）を喪うもまた君（＝同上）を有し、その功は地軸をも迴らし、策は天文を動かすごとし。猶お（黄帝の）赤水に臨み、尚お（虞舜の瑞祥である）黄雲を復するがごとし。諸侯八友をもって、天下を三分す。

（「周上柱国斉王憲神道碑」
宣政元〈五七八〉年、　庾信六十六歳）

⑨文皇帝の覇跡、基を初めらるるや、英雄、輻輳せり。

（「周大将軍上開府広饒公鄭常墓誌銘」
大象二〈五八〇〉年、　庾信六十八歳）

⑩太祖文皇帝は、旧君の恥（前出）を雪ぎ、西伯（周の文王）の功を連ね、始めて鴻溝を裂き、初めて函谷に登る。

（「周上柱国宿国公河州都督普屯威神道碑」
隋・開皇元〈五八一〉年、　庾信六十九歳）

これらの文を総合的にまとめていえば、宇文泰が高歓の乱を収拾し、西魏帝を支えて国家の危機を扶け、新しい職官制を定めて、天下の英雄を招き、その覇業を成し遂げるまでのおおよその経緯が、礼賛的に述べられている。ところが、この「礼賛」について、従来の解釈では、表面的な面従の文章であり、彼は終生北朝に対し臣従する意志はなかったと見る向きがあったように思われるが、いかがであろうか。

この点に関しては、人間の忠義の問題を集中的に検討して優れた成果を納めた、ボルノーの発言がよい参考になろう。[26] 彼はいう、「（忠実と信義という）この二つの概念は互いに必然的に関係しあっている。信義は他者の忠実を信頼するふるまいであり、他方、逆に忠実は他者を信ずることをはじめて可能にするような信頼性を意味している。」「人間に信頼が寄せられるところでのみ、人間は忠実でありうる。」「二人の人間が相互的に信頼し合うという仕方で応じ合う場合には、親密の関係が成立する。」と。

封建社会下の仕組みでは、その忠義義務をよく履行するものであってこそ、心からの承認としての高い官位が初めて下賜されるものであろう。庾信の北朝での高官への就任は、一度目はともかく、二度目以降は庾信の中の深い部分で、この臣従関係を受け入れる感情があればこそである、と考えられる。庾信と宇文泰、さらには後の北周の明帝・武帝や滕王らとの親密といってよいほどの交流は、そうした相互の信頼関係の感情を抜きにしては、到底ありえぬというべきであろう。さればこそ、宇文泰による「（庾信への）綢繆たる礼遇や推恩」（滕王の前出の文）も、あるいは逆に、庾信による北周の顕貴らのための墓碑銘や、朝廷の新楽を賀する表などの執筆も、正当的な歴史的展開への自己の参与の結果としての当為的義務と判断する限りにおいて、矛盾なくなされたのであろう。

こうした庾信と北朝の深い部分での信頼関係を、さらに端的に示すものを、彼の文集から上げることができる。

太祖、始めて成都を定めしとき、（尉遲迥をして）すなわち江陵（を

平ぐ）の志しあり。（このおり、長孫）公は、密かにその策を献じ、符にその深き旨を懸け、糧運（＝食糧と運送）積めること久しく、梯衝（＝雲梯と衝車）たちまち備う。一戦して鄢・郢を挙げ、再戦して夷陵を焼き、遂に三荊を席巻するを得たり。これまた公の勲なり。詔して奴婢三百口を賞せらる。太祖、公に与うる書にいわく、「公が立計に由り、果して謀る所の如し」と。公をして江陵に鎮となさしめ、もって蜀地を安んぜしむ。

（「周柱国大将軍長孫倹神道碑」天和四〈五六九〉年、　庾信五十七歳）

これはあの江陵陥落を、西魏側からの視点で客観的に記したものであり、この時期の庾信が、それを冷静に歴史の不可避の事件として受け止めるようになったことを示す、注目すべき資料である。このような文章を執筆する根底には、後年の庾信の中に、宇文泰に対する評価として、彼が江南の旧体制の残骸を乗り越え、その結果課せられてきた世界再建の大きな義務に、十分に答えうるだけの優れた能力の持ち主であった、という理解の深化があったからにほかなるまい。宇文泰は、古代中国にかつて現出した地上の王国＝周の、その政治理念と制度に倣い、それを今日の状況にふさわしい形に手直しをして、弊害の多い門閥貴族制より、「賢才主義」を基軸にしたより開かれた貴族制への移行を明確化した点で、後の隋唐帝国の誕生に連なる大きな貢献をなしたといえる。結局、庾信の転回は、宇文泰を初めとする当時の人々の、体制改革と天下統一への熱い期待の躍動が、梁朝への忠義という死んだ形式に勝った結果である、といえるのではないか。

北周の太祖・宇文泰の死は突然だったようだ。その死については、彼の甥の晋蕩公・宇文護伝の方に具体的に記される。それによれば、太祖が西方を巡撫中に病いに遇い、急遽護が召され涇州（今の甘粛省涇川県）まで行って見えた時には、すでに危篤の状態であった。太祖は、「吾が形容かくのごとし。必ずこれ済われず。諸子は幼少なるも、寇賊未だ寧からず。天下の事、これを汝に属す。宜しく力を勉めて以って吾が志を成せ」と、遺言している。時に、五五六年十月、一代の「英豪」宇文泰、五十二歳の崩御であった。庾信と宇文泰との短い交流もここに終わりを告げることになる。宇文護は早速、この年の十二月には、魏帝をして位を譲らせ、北周を誕生させている。宇文護は建国の大功を立てたわけだが、このことが次第に北周王室内に新たな対立を引き起こす遠因になっていく。

庾信の異朝での基盤はまだきわめて脆弱であったろうから、こうした政権の不安定さについては、息を殺して見守るよりなかったであろう。「百尺の高きの、九碁の上に累なり、千鈞の重みの、一木の枝に懸かる」（「擬連珠」其三十二）という表現には、彼の中のそうした不安な心情に連なるものを見て取ることができる。また、彼の恥辱感も、心の奥深くに刻印されており、それが時に表面化してくることもあったようだ。が、それらの問題については、また別の機会に論じたく思う。

おわりに

以上、庾信の西魏への屈服後の苦悩から、宇文泰（北周の太祖）に帰順するまでの、彼の精神的軌跡を中心にして論じてきたが、この考察を進めていくうちに、文学的領域を超えて、いつしか史学上の問題と不可分のレベルにまで及ばざるを得なくなった。すなわち、庾信という江南門閥貴族の最後のシンボルたる人物において、この体制を支えたその精神と彼の教養主義とがどう関わり、それが彼の転節・回心とどう結びつ

くのか。またそれが、文学的に見て、諸作品にどのように表現されているのか。さらには、西魏における新しい世界秩序の意欲的な探求が、旧体制の代表ともいうべき庾信の眼にどう映じ、それが彼の異国での再出発にどのような影響を与えたのか、等の視点がそれである。史学は門外漢であるため、この方面で優れた成果を上げられた谷川氏の見解を参考に、それを庾信一人に集約しての検討といった面を持つことになった。が、筆者としては、できる限り庾信の精神的な軌跡とその作品の関係を主体に考察を行ったつもりである。

ところで、これまで庾信の魏周易代期における転回についての詳細な研究がなされなかった背景の一つには、中国の封建的な倫理感からいって、普通には評価しにくい、といった考えがあったためではなかろうか。例の清初の愛国主義者全祖望が、「甚だし、庾信の無恥なるや。身を宇文に失す」（「題哀江南賦后」）と酷評したのなどは、その最たるものであろう。こういう過激な発言もあってか、これまでこの問題を正面から論ずるのを、何となく避けてきた感がある。しかし、全説は六朝から隋唐への体制、および庾信精神の展開の変化の意味を、十分に理解してのものではないのみならず、明末清初の抗満運動の中での政治的な意味の発言でもあり、そうした事情を考えなければ、庾信の生涯とその文学それ自体の理解には、かえってマイナスでしかないであろう。

小稿でこれまで見てきたように、庾信は中世の貴族制の理想とした、人格的・道徳的な統治のいわば典型的実践者であったと思われ、それゆえにこそ他の同時代人と異なってこの屈服にひどく苦悩もし、それを経て初めて新たな転回をも決意するわけで、その人間的な葛藤の部分を顧慮せずに、かえって真摯な他人の苦悩に乗じ、狭い封建的な価値観で一面的に否定したり、自己の恣意的な視点から論ずるのは妥当ではあるまい。全祖望の期待するような殉節は、かえって当時の庾信に安易な愚忠や、悲劇的な過去への無自覚的な盲従を求めることになるのではないか。ちなみに、庾信と少し似たケースを上げるならば、かの清初の進歩的思想家黄宗羲も、最近の研究によれば、[27] 康熙十八年以後の墓誌銘には、清朝の年号を多数使用するようになったり、さらには、彼が康熙帝を多方面より賞賛し、また清朝を「国朝」「国家」と述べたりしていることなどが明らかにされ、それはすなわち清朝政権の合法性を承認した表れ、との解釈が行われている。これは複雑な現実社会・人間の内面性の理解にあたっては、単一・機械的な視点や方法論は禁物であることを、教えてくれる報告であろう。

庾信のみならず、人間は誰もが一定の過去を背負っている。祖国・時代・体制・家柄・境遇等々、そうしたものの総体として、現在の自己がある。そうした過去に限定され、条件づけられて各個があるのは事実だが、それをどのように現実に意味あるものにするかは、さらに各個人の意味深い選択や決断・自覚的な努力が不可欠であろう。梁の滅亡、門閥貴族制の崩壊等の悲劇的な過去を背負い、半死半生の「枯樹」の状態に陥った所から、彼が再び理性を回復し、衰滅していく運命にあるものと決して死滅してはならぬものを理解し、自己の歩むべき道を誤たず選択して行く過程は、今日の眼からみても、「すぐれて可能的な人間」[28]の一つの典型的あり方を示唆するように、私には思われる。最後に、大方の御批正をお願いする次第である。

注

（1）「梁朝社会下の庾信」（『愛媛大学教育学部紀要』II―十九　'87）「西魏下における庾信のレジスタンス」（『集刊東洋学』五十九　'88）

（2）魯同群「庾信入北仕歴及其主要作品的写作年代」（『文史』十九輯　'83―八中華書局）、王仲鏞「〈哀江南賦〉著作年代問題」（『中華文史論叢』'84―四

輯　上海古籍出版社）、凌迅「読庾信的〈擬詠懐詩〉」（『文史哲』'82―二期山東人民出版社）。ただし、この凌論文は、陳より庾信・王褒らの帰国要請があったおり、それを認めてもらうべく孝閔帝に対して示したのが、この「哀江南賦」だとしている。この要請は正しくは武帝の時のことであるから、この説は改めて何らかの訂正が必要であろう。

（3）本稿所引の二十四史は中華書局版による。また、庾信関係のテキストは、許逸民校点『庾子山集注』（中華書局　'80）を用いた。

（4）谷川道雄氏「北朝後期の郷兵集団」（『隋唐帝国形成史論』　筑摩書房　'71）の二五四頁を参照。

（5）Max Scheler「羞恥と羞恥心」（『シェーラー著作集』十五　浜田義文訳　白水社　'78）を参照。

（6）興膳　宏氏『庾信』（集英社　'83）

（7）許　東海『庾信生平及其賦之研究』（文史哲出版社　台湾　'84）の一七一～二頁の指摘を参照。

（8）ガストン・バシュラール（Gaston Bachelard）『空と夢』（宇佐見英治訳　法政大学出版局　'68）の第十章「大気の樹木」を参照。

（9）南北朝末期から隋唐への歴史的展開については、谷川道雄氏の諸研究に多くを負っている。主要著書としては、前掲（4）の外に『中国中世社会と共同体』（国書刊行会　'76）、『中国中世の探求』（日本エディタースクール　'87）等があり、参考にさせていただいた。

（10）沈海燕氏「連珠体試論」（『文学遺産』'86―四期　中国社会科学院文学研究所）を参照。

（11）前掲魯論文で、氏は「擬連珠」を四十八歳以前の作とするが、その一理由としてこの「五十」の表現について、「一般人が自己の年齢をいう習慣によれば、五十歳以前、多くとも五十歳までとすべきであり、…まさに概数とみなすべきである」と、述べる。

（12）横山　弘氏「陸庾連珠小考」（『中国文学報』第二十二冊　'68）では、庾信の連珠の内容上の特色として、陸機の普遍への志向・倫理的姿勢とは対照的なものとして、自己の現在的身世への志向・審美的姿勢を指摘される。したがって、拙稿に述べるのと理解が異なることになるが、その根本的な理由は、結局は「哀江南賦」「擬詠懐」「擬連珠」等の制作年代をいつにおくか、の解釈の相違に起因する点が大きいであろう。

（13）谷川氏「六朝貴族における学問の意味」（『中国中世社会と共同体』所収）の一〇八頁を参照。

（14）趙翼『陔餘叢考』巻十七「六朝忠臣無殉節者」、同「六朝重士族」。吉川忠夫氏「顔之推論」（『六朝精神史研究』所収　同朋社　'84）の二七四頁、鍾優民『望郷詩人庾信』（吉林大学出版社　'88）の百頁等を参照。

（15）前掲吉川論文に詳述するのを参照。

（16）『朱光潜全集』第四巻（安徽教育出版社　'88）の「談羞悪之心」七十二頁を参照。

（17）前掲拙稿「梁朝社会下の庾信」

（18）シェーラー「悔恨と再生」（『人間における永遠なるもの』上　所収　『同著作集』六　小倉貞秀訳　'77）を参照。

（19）注（13）を参照。

（20）注（2）の魯論文を参照。

（21）前掲注（4）の二四七～八頁を参照。

（22）この点に関連することとして、筆者はかつて「梁朝社会下の庾信」の中で（七〇頁）、社会の不安定化の中での「宮体詩」の国家的推進の背景に、貴族文化を一層強化しそれに国家的権威を付し、体制動揺の根源となりつつあった新興勢力の「庶賤微人」等との差異を強調することで、実力派寒人層を牽制し、梁朝体制を懸命に維持しようとする政治的意図があったのではないか、と推測したことがある。これが事実であれば、これも文化や教養を政治と連結させる、江南貴族の態度を示す一例となろう。

（23）これについては、前掲横山、沈両論文が有益な考察を行っているのを参照。

（24）前掲「梁朝社会下の庾信」の八四頁を参照。

（25）谷川氏「西魏〈六条詔書〉における士大夫倫理」（前掲『中国中世社会と共同体』所収）に詳述されるのを参照。

（26）O.F. Bollnow『徳の現象学』（森田　孝訳　白水社　'83）第十一章「忠実」を参照。

（27）南炳文「黄宗羲政治思想的一箇方面―肯定封建君主専制制度」（中国人民大学編『清史研究通迅』'87―一期）、王政堯「黄宗羲晩年思想探析」（『光明日報』'89・11・22）を参照。

（28）中村雄二郎『哲学の現在』（岩波新書　'77）の第一章を参照。